ゲート

自衛隊　彼の地にて、斯く戦えり

1.接触編〈上〉

柳内たくみ Takumi Yanai

アルファポリス文庫

http://www.alphapolis.co.jp/

主な登場人物 Main Characters

黒川茉莉（くろかわまり）

23歳。自衛官。
毒舌だが
看護師の資格を持つ。

倉田武雄（くらたたけお）

21歳。自衛官。
ケモノ娘萌で伊丹とは
オタク仲間。

伊丹耀司（いたみようじ）

33歳。陸上自衛隊二等陸尉、
第三偵察隊隊長。
オタク趣味の持ち主。

ボーゼス・コ・パレスティー

19歳。
帝国貴族のお嬢様。
ピニャの騎士団に所属。

栗林志乃（くりばやしのしの）

24歳。
格闘徽章を有する自衛官。
小柄だが巨乳。

レレイ・ラ・レレーナ

15歳。
ヒト種の賢者、魔導師。
頭脳明晰で無表情な少女。

テュカ・ルナ・マルソー

165歳。
エルフ上位種族の娘。
金髪碧眼でスタイル抜群。

梨紗（りさ）

29歳。
伊丹の元妻で
女性向け同人誌作家。

モルト・ソル・アウグスタス

異世界の帝国に
君臨する皇帝。

ピニャ・コ・ラーダ

19歳。
モルト皇帝の娘。
騎士団を従える女傑。

ロウリィ・マーキュリー

961歳。
神エムロイに仕える亜神。
フリフリの黒ゴス神官服を纏う。

序

二〇××年　夏

その日は、蒸し暑い日であったと記録されている。

気温は摂氏三十度を超え湿度も高く、ヒートアイランドの影響もあって街は灼熱の地獄と化していた。にもかかわらず土曜日であったために、多くの人々が都心へと押し寄せ、買い物やウィンドウショッピングを楽しんでいる。

午前十一時五十分。

陽光は中天にさしかかり、気温もいよいよ最高点に達しようとした頃、東京都中央区銀座に突如『異世界（ゲート）への門』が現れた。

中から溢（あふ）れだしたのは、中世ヨーロッパの鎧に似た武装の騎士と歩兵。そして……ファンタジーの物語や映画に登場するようなオークやゴブリン、トロルと呼ばれる異形の怪

異達だった。

彼らは、たまたまその場に居合わせただけの人々へと襲いかかった。

老いも若きも男も女も、人種国籍すら問われなかった。それは、あたかも殺戮そのものが目的であるかのようだった。平和な国の平和な時代であることに慣れ親しんだ人々に抵抗の術はなく阿鼻叫喚の惨劇の中で次々と倒れていった。

買い物客が、親子連れが、そして海外からの観光客達が次々と馬蹄に踏みにじられ、槍を突き刺され、そして剣によってその命を絶たれた。累々たる屍が街を覆い尽くし、銀座のアスファルトは血の色で赤黒く舗装された。その光景にあえて題字をつけるならば『地獄』。異界の軍勢は、積み上げた屍の上にさらなる屍を積み、そうして出来た肉の小山に漆黒の軍旗を掲げたのである。そして彼らの言葉で、声高らかにこの地の征服と領有を宣言した。それは聞く者の居ない一方的な宣戦布告だった。

『銀座事件』

歴史に記録される異世界と我らの世界との接触は、後にこのように呼ばれることとなった。

＊　＊

時の首相、北条重則は国会で次のような答弁を行っている。

「当然のことであるが、その土地は地図に載ってはいない。

どんな自然があり、どんな動物が生息するのか。そして、どのような人々が暮らしているのか。その文化レベルは？　科学技術のレベルは？　宗教は？　統治機構の政体すらも不明である。

今回の事件では、多くの犯人を逮捕した。

逮捕などという言葉を用いるのも、もどかしく感じる。これと言うのも、憲法や各種の法令がかかる事態を想定していないからである。そして我が国が、有事における捕虜の取り扱いについての法令を定めていないからでもある。現在の我が国の法令に従えば、彼らは刑法を犯した犯罪者でしかないのだ。

ならば、強弁と呼ばれるのも覚悟で特別地域を日本国内と考えることにする。

『門』の向こう側には、我が国のこれまで未確認であった土地があり、住民が住んでいると考えるのである。向こう側に統治機構が存在するとしても、これと交渉し国境を確定して、国交を結ばなければ独立した国家としては認められない。現段階では、彼らは

無辜（むこ）の市民と外国人観光客の命を奪った武装勢力でありテロリストなのだ。

彼らと平和的な交渉をという意見があることも承知している。だが、それをするには相手を交渉の席に座らせなければならない。だがどうやって？　現実的に我々は『門（ゲート）』の向こう側と交渉を持っていないのに。

我々は『門』の向こう側に存在する勢力を、我々との交渉のテーブルに着かせなければならないのだ。力ずくで、頭を押さえつけてでもだ。

交渉を優位に進めるには、相手を知る必要もある。

逮捕した犯人達……言葉が通じない彼らからも、少しずつ情報を得ることが出来るようになった。だが、それだけを頼りにするわけにもいかない。誰かがその眼と耳で確かめるために赴（おもむ）かなければならないだろう。

従って、我々は『門』の向こう側へと踏み入る必要があるのだ。

だが、無抵抗の民間人を虐殺するような、野蛮かつ非文明的な土地へと赴くのである。相応の危険を覚悟しなければならないだろう。

まずは、非武装と言うわけにもいかない。さらに特別地域内の情勢によっては、交戦することも考えられる。未開の地で誰を味方とし、誰を敵とするか、その判断も現場にある程度委ねなければならない。

何も、危ないところへわざわざ行く必要はない。いっそのこと、『門』が二度と開かれることのないように破壊してしまえばよいという意見が、野党の一部から出ていることも承知しているが、ただ扉を閉ざしてこれで安全だと言い切れるのだろうか？

これから日本国民は、同じような『門』が今度はどこに現れるかという不安を抱えて生活しなくてはならなくなる。今度、あの『門』が開かれるのはあなた方の家の前、家族の前かもしれない。さらには、被害者やご遺族への補償をどうするかという問題もある。

もし、特別地域に統治機構があってそこに責任者がいると言うのであらば、我が国の政府としては、今回の事件について誠意のある謝罪と補償、そして責任者の引き渡しを断固として求めなければならない。

もし相手方がこれに応じないならば、首謀者を我らの手で捕らえ裁きにかける。資産等があればこれを力ずくにでも差し押さえて、遺族への補償金に充てる。これは、被害者やご遺族の感情からみても当然のことである。従って、我が日本国政府は、『門』の向こうに必要な規模の自衛隊を派遣することと決定した。その目的は調査であり、かつ銀座事件の首謀者逮捕のための捜査であり、補償獲得のための強制執行である」

特別地域自衛隊派遣特別法案は、野党の一部が反対するなか、衆参両議院で可決された。

なお、アメリカ合衆国政府は、『門』の内部の調査には、協力を惜しまない」との声明を発表している。北条総理は「現在の所は必要ではないが、情勢によってはお願いすることもありえる。その際はこちらからお願いする」と返答している。

また、中国政府は、『門』という超自然的な存在は、国際的な立場からの管理がなされることが相応しい。日本国内に現れたからと言って、一国で管理すべきではない。ましてや、そこから得られる利益を独占するようなことがあってはならないとのコメントを発表した。

＊　＊

「あえて言上いたしますが大失態でありましたな。この未曾有の大損害に際して、いかなる対策を講じられるおつもりか、陛下のお考えを承りとう存じます」

元老院議員であり、貴族の一人でもあるカーゼル侯爵は、議事堂中央に立って玉座の皇帝モルト・ソル・アウグスタスに向けて歯に衣着せぬ言葉を突きつけた。

元老院議員は議場内であれば、至尊の座を占める者に対してもそれをすることが許されていたし、またそれをすることが求められていると確信していたからでもある。

薄闇の広間。

そこは厳粛であることを旨に、華美な飾り付けを廃し静謐と重厚を感じさせる石造りの議事堂だった。円形の壁面にそって並べられたひな壇に、いかめしい顔つきの男達が座って、中央をぐるりと囲んでいる。

数にしておよそ三百人。帝国の支配者階級の代表たる、元老院議員達であった。

この国において元老院議員となるには、いくつかのルートが存在する。その一つが権門の家に生まれること。何処の国であっても、貴族とは稀少な存在であるが、この巨大な帝国の首都では石を投げれば貴族に当たると言われているほどに数が多いのだ。従って、ただ貴族の一人として生まれただけでは、名誉ある元老院議員の席を得ることはかなわない。貴族の中の貴族と言われるほどの名門、権門の一員でなければ、元老院議員とはなれないのである。

では、権門でもなく名門でもない家に生まれた貴族は、永遠に名誉ある地位を占めることは出来ないかというと、そうでもないのである。その方法として開かれている道が、大臣職あるいは軍において将軍職以上の位階を経験することであった。

国家の煩雑且つ膨大な行政を司るには官僚の存在が不可欠である。権門ではないが貴族の一族として生まれ、才能に恵まれた者が立身を志したなら、軍人か官僚の道を選ぶ

という方法が存在した。軍や官僚において問われるのは実務能力である。名ばかり貴族の三男坊であっても、才能と勤労意欲、そして幸運さえあればこの道を進むことも可能なのである。

大臣職は宰相、内務、財務、農務、外務、宮内の六職ある。軍人となるか官僚となる道を選び、大臣か将軍の職を経験した者は、その職を退いた後に自動的に元老院議員たる地位が与えられる。ちなみに将軍職については、出身階級が平民であっても就くことが出来る。と言うのも士官になると騎士階級に叙せられ、位階を進めるにつれ貴族に名を連ねることも可能だからである。

カーゼル侯爵は、男爵という貴族としてはあまり高いとは言えない位階の家に生まれた。そこからキャリアを積み、大臣職を経て元老院議員たる席を得たのである。そうした努力型の元老院議員は、自らの地位と責任を重く受け止める傾向がある。要するに張り切りすぎてしまうのである。得てしてそういう種類の人間は周囲からは煙たがられるもので、そして煙たがられれば煙たがられるほど、より鋭く攻撃的な舌鋒になってしまうのだ。

「異境の住民を数人ばかり攫ってきて、軟弱で戦う気概もない怯懦な民族が住んでいると判断したのは、あきらかに間違いでした」

もっと長い時間をかけて偵察し、可能ならばまずは外交交渉をもって臨み、与し易い相手かどうかを調べ上げるべきだった、と畏みかけた。

確かに、現在の情勢は最悪である。

帝国の保有していた総戦力のおよそ六割を、今回の遠征で失ってしまったのだ。この回復は不可能でないにしても容易ではなく、莫大な経費と時間を必要とするだろう。

当面は、残りの四割で帝国の覇権を維持していかなくてはならない。だが、どうやって？

モルト皇帝は即位以来の三十年、武断主義の政治を行ってきた。周辺を取り囲む諸外国や、国内の諸侯・諸部族との軋轢、諍いを武力による威嚇とその行使によって解決して、帝国による平和と安寧を押しつけてきた。その圧倒的な軍事力を前にしてはいかなる国も恭順の意を示すより他はなく、あえて刃向かった者は全て滅んでいった。

諸侯の帝国に対する反感がどれほど強かろうと、圧倒的な武威を前にしてはそれを隠すしかない。帝国は、この武威によって傲慢かつ傍若無人に振る舞うことが許されてきたのである。

だが、覇権の支柱たる圧倒的な軍事力の過半を失った今、これまで隠忍自重をつづけてきた外国や諸侯・諸部族がどう動くか？

帝国におけるリベラルの代表格となったカーゼル侯爵は、法服たるトーガ（トーガに似た正装）の裾をはためかせるように手を振り、声を張りあげて問いかけた。

「陛下！　皇帝陛下は、この国を、どのように導かれるおつもりか!?」

カーゼル侯爵が、そのように演説を結んで席に着くと、皇帝は重厚さを感じさせるゆっくりとした所作で、玉座の身体をわずかに傾けた。その視線はゆらぐことなく、自らを指弾した論客へと真っ直ぐに向いていた。

「侯爵……卿の心中は察するものである。此度の損害によって帝国が有していた軍事的な優位が一時的にせよ失せていることも確かなのだから。外国や諸侯達が隠していた反感を顕わにし、一斉に反旗を翻し鋭い槍先をそろえて帝都まで進軍して来るのではないかと、恐怖に駆られて夜も眠れないのであろう？　痛ましいことである」

皇帝のからかうような物言いに、厳粛な議場の空気がくぐもった嘲笑で揺れた。

「元老院議員達よ、二百五十年前のアクテクの戦いを思い出してもらいたい。全軍崩壊の報を受けた我らの偉大なる祖先達が、どのように振る舞ったか？　勇気と誇りを失い、敗北と同義の講和へと傾く元老院達を叱咤する、女達の言葉がどのようなものであったか？

『失った五万六万がどうしたというのか？　その程度の数、これで幾らでも産んでみせる』と言ってスカートをまくって見せた女傑達の逸話は、あえて言うまでもないだろう？

この程度の危機は、帝国開闢以来の歴史を紐解けば度々あったことである。わが帝国は、歴代の皇帝、元老院、そして国民がその都度、心を一つにして難事に立ち向かい、さらなる発展を成し遂げてきたのである」

皇帝の言葉は、この国の歴史であった。

元老院に集う者にとっては、改めて聞かされるまでもなく誰もがわきまえていることであった。

「戦争に百戦百勝はない。だから此度の戦いの責任の追及はせぬ。敗北の度に将帥に責任を負わせていては、指揮を執る者がいなくなってしまう。まさかと思うが、他国の軍勢が帝都を包囲するまで、裁判ごっこに明け暮れようとする者はおらぬな？」

議員達は、皇帝の問いかけに対して首を横に振って見せた。

誰の責任も問われないとなれば、皇帝の責任を問うことも出来ない。カーゼルは、皇帝が巧みに責任を回避したことに気付いて舌打ちをした。ここであえて追及を重ねれば、小心者と罵倒された上に、裁判ごっこをしようとしていると言われかねない雰囲気になっていたのだ。

さらに皇帝は続けた。

　此度の遠征では熟練の兵士を集め、歴戦の魔導師をそろえ、オークもゴブリンも特に凶暴な個体を選抜した。
　十分な補給を整え、訓練を施し、それを優秀な将帥に指揮させた。これ以上はないという陣容と言えよう。
　将帥が将帥たる責務、百人隊長が百人隊長たる責務、そして兵が兵たる責務を果たすよう努力したはずだ。
　にもかかわらず、七日である。
『門』を開いてわずか七日ばかり。敵の本格的な反撃が始まってからを数えるならば、二日で我が軍は壊滅してしまったのだ。
　将兵の殆どが死亡するか捕虜となったようだ。ようだ、と推測することしか出来ないのも生きて戻れた者が極めて少ないからである。
　今や『門』は敵に奪われてしまった。『門』を閉じようにも、『門』のあるアルヌスの丘は敵によって完全に制圧されて、今では近付くことも出来ないでいる。
　これを取り戻そうと、数千の騎兵を突撃させた。だがアルヌスの丘は、人馬の死体が覆い尽くし、その麓には比喩でなく血の海が出来てしまった。
「敵の武器のすごさがわかるか？　パパパ！　だぞ。遠くにいる敵の歩兵がこんな音を

させたと思ったら、味方が血を流して倒れているんだ。あんな凄い魔術、儂は見たこともないわ」
　魔導師でもあるゴダセン議員が、敵と接触した時の様子を興奮気味に語った。
　彼と彼の率いた部隊は、枯れ葉を掃くようになぎ倒され、丘の中腹までも登ることが出来なかった。ふと気づいた時には静寂があたりを押し包み、動く者は己を除いてどこにもいない。見渡す限りの大地を人馬の躯が覆っていたと述懐した。
　皇帝は瞑目して語る。
「既に敵はこちら側に侵入してきている。今は門の周りに屯して城塞を築いているようだが、いずれは本格的な侵攻が始まるだろう。我らは、アルヌス丘の異界の敵と、周辺諸国の双方に対峙していかなければならない」
「戦えばよいのだっ！」
　禿頭の老騎士ポダワン伯爵は、立ち上がると皇帝に一礼して、主戦論をもって応じた。
「窮している時こそ、積極果敢な攻勢が唯一の打開策じゃ。帝国全土に散らばる全軍をかき集めて、逆らう逆賊や属国どもを攻め滅ぼしてしまえ！　そして、その勢いを持ってアルヌスにいる異界の敵をうち破る！　その上で、また門の向こう側に攻め込むのじゃ！」

議員達は、あまりに乱暴な意見に「それが出来れば苦労はない」と、首を振り肩をすくめつつヤジの声を投げた。全戦力をかきあつめれば、各方面の治安や防衛がおろそかになってしまう。皆が口々に罵声を放ちあって、議場は騒然となった。

ポダワンは、逆賊共は皆殺しにすればよい。皆殺しにして、女子どもは奴隷にしてしまえばよい。街を廃墟にし、人っ子一人としていない荒野に変えてしまえば、もうそこから敵対する者が現れる心配などする必要もなくなる……などと、過激すぎる意見で返していた。非現実的なことのようだが、歴史的に見れば帝国にはその前科がある。

帝国がまだ現在よりも小さく、四方の全てが敵であった頃、敵国をひとつずつ攻略しては住民全てを奴隷とし、街を破壊し、森は焼き払い農地には塩をまいて不毛の荒野とし、周囲を完全な空白地帯とすることで安全を確保したのである。

「それが出来たとしても一体全体どうやってアルヌスの敵を倒す？　力ずくでは、ゴダセンの二の舞を演じることになろうな？」

議場の片隅から飛んできた声に対して、ポダワン伯は苦虫を噛みつぶしたような表情をしながらも、苦しげに応じる。

「う～そうじゃな……属国の兵を根こそぎかき集めればよい。四の五の言わせず全部かき集めるのじゃ。さすれば数だけなら十万にはなるじゃろて。弱兵とは言え矢玉除けにはなる。その連中を盾にして、遮二無二、丘に向かって攻め上れればよいのじゃよ！」

「連中が素直に従うものか！」

「そもそもどんな名目で兵を供出させる？　素直に軍の過半を失いましたから、兵を出して下さいとでも頼むのか？　そんなことをしたら、逆に侮られるぞ」

カーゼル侯は、空論を振りかざして話をまとまりのつかない方向へとひっぱっていこうとするポダワン伯という存在を苦々しく思った。

タカ派と鳩派双方からの聞くに耐えない言葉の応酬が始まり、議場は掴み合いに陥りかねない雰囲気が漂いだした。

「ではどうしろと言うのか⁉」

「ひっこめ戦馬鹿！」

議員達は冷静さを失って乱闘寸前にまでヒートアップする。

時間だけが虚しく過ぎ去って行く。わずかに理性を残す者もこのままではいけないと思うものの、紛糾する会議をまとめることが出来ないでいた。

そんな中で、皇帝モルトが立ち上がる。

発言しようとする皇帝を見て、罵り合う議員達も口を噤んで静かになっていった。

「いささか乱暴であったが、ポダワン伯の言葉は示唆に富んでおった」

それを受けてポダワンは、皇帝に恭しく一礼した。

皇帝の威厳を前にして議員達は冷静さを取り戻していく。皇帝が次に何を言うのか聞こうとし始めているのだ。

「さて、どのようにするべきかだ。このまま事態が悪化するのを黙って見ているのか？それも一つの方法ではある。だが、余はそれは望まない。となれば、戦うしかあるまい。ポダワン伯の進言を採用し、属国や周辺諸国の兵を集めるが良いであろう。各国に使節を派遣せよ。ファルマート大陸侵略を窺う異世界の賊徒を撃退するために、援軍派遣を求めるとな。我らは連合諸王国軍を糾合し、アルヌスの丘へと攻め入る」

「連合諸王国軍？」

皇帝の言に元老院議員達は、ざわめいた。

今から二百年ほど前に東方の騎馬民族からなる大帝国の侵略に対抗するため、大陸諸王国が連合してこれと戦ったことがあった。それまで相争っていた国々が集うのに、「異民族の侵攻に対して仲間内で争っている場合じゃない」という心理が働いたのである。不倶戴天の敵として争っていたはずの列国の王達が、騎士達が、馬を並べて互いに助け合い異民族へと向かっていく姿は、今では英雄物語の一節として語られている。

「それならば、確かに名分にはなるぞ」

「いやしかし、それはあまりにも……」

そう。そもそも『門』を開いて攻め込んだのはこちらではなかったか？　皇帝の言葉はその主客を転倒させていた。こちらから攻め込んでおいて、「異世界からの侵略から大陸を守るため」と称して各国に援軍を要請するとは、厚顔無恥にもほどがあるのではないか。……それをあえて口にする者はいなかったが。

とはいえ「帝国だけでなくファルマート大陸全土が狙われている」と檄を飛ばせば、各国は援軍を送ってよこすだろう。要するに、事実がどうであるかではなく、どう伝えるかと言うことだ。

「へ、陛下。アルヌスの麓は、人馬の躯で埋まりましょうぞ？」

カーゼル侯の問いに、皇帝モルトは嘯くように告げる。

「余は必勝を祈願しておる。だが戦に絶対はない。故に、連合諸王国軍が壊滅するようなこともありうるやも知れぬ。そうなったら、悲しいことだな。そうなれば帝国は旧来通りに諸国を指導し、これを束ねて、侵略者に立ち向かうことになろう」

周辺各国が等しく戦力を失えば、相対的に帝国の優位は変わらないということである。

「これが今回の事態における余の対応策である。これでよいかなカーゼル侯？」

皇帝の決断が下った。

カーゼルは連合諸王国軍の将兵の運命を思って、呆然とした面持ちとなった。
周囲は、そんなカーゼルら鳩派を残し、皇帝に向かい深々と頭を下げると、粛々と各国への使節を選ぶ作業へと移ったのである。

＊　＊

打ち上げられた照明弾が、漆黒の闇を切り裂き大地を煌々と照らす。
彼らがみずからをして『コドウ・リノ・グワバン』と呼ぶ、敵の突撃が始まった。
人工の灯りと、中空に打ち上げられた照明弾によって、麓から押し寄せる人馬の群れが浮かび上がる。
重装騎兵を前面に押し立て、オークやトロル、ゴブリンといった異形の化け物が大地を埋め尽くして突き進んで来る。その後ろには、方形の楯を並べた人間の兵士が続いていた。
上空には、人を乗せた怪鳥の群れが見える。
数にして、数千から万。はっきり言って数えようがない。
監視員が無線に怒鳴りつけていた。

「地面三分に、敵が七分。地面が三分に敵が七分だ!!」
敵意が、静かに、ひたひたと押し寄せて来る。
哨所からの知らせを受けた、陸上自衛隊特地方面派遣部隊・第五戦闘団第５０２中隊の隊員達は交通壕を走ると、第二区画の各々に指定された小銃掩体へと飛び込んで、担当範囲へ向けて銃を構えた。
陸自の幕僚達は、今回の特地方面派遣部隊を編成するに当たっては、かなり苦心惨憺していた。なにしろ、文明格差のある敵である。槍や甲冑で身を固めた敵と対峙した経験を持つ者などどこにもいないし、魔法やら、ファンタジーな怪異、幻想種への対処法に至っては、知るよしもない。
そこで彼らは、小説や映画にアイデアを求めることとした。
自衛隊のＰＸ（売店）では自衛隊が戦国時代にタイムスリップする小説はもとより、漫画、挙げ句の果てに新旧の映画版やテレビ版のＤＶＤが飛ぶように売れたという。さらにはファンタジーの映画やアニメを求めて幹部自衛官が秋葉原の書店に列を作るという、笑っていいのかいけないのか分からない事態すらおこっている。
Ｍ氏やＴ氏といった高名なアニメ監督や小説家などが、市ヶ谷に集められて参考意見を求められたという話までもがまことしやかに語られているほどなのだ。

そして彼らは某（なにがし）かの結論を下すと、全国の各部隊から合わせて三個師団相当の戦力を抽出したのである。

それは一尉～三尉の幹部と三等陸曹以上の陸曹を集中するという特異な編成であった。

その理由としては、首相の答弁にある『未開の地で誰を味方として、誰を敵とするか』という高度な判断力を現場の指揮官に求める必要があるからと説明しているが、それだけではないことは、誰の目にも明らかだった。

特地方面派遣部隊は、かき集められた装備にも特徴があった。比較的古い物が多く見られるということである。まず隊員達の携行する小銃は六四式小銃（ろくよんしきしょうじゅう）。集結した戦車は七四式だった。全て新装備が導入されたことで、第一線からは姿を消しつつあるものだ。

「在庫一斉処分」などと口の悪い最先任上級曹長は語っている。そういう側面がないとも言えないが、そればかりが理由ではないのだ。

六四式小銃が選択されたのは八九式の5・56㎜弾では、槍を構えて突っ込んで来る重量級のオークを止めることが出来なかったからだ。さらに同銃の銃剣で敵を刺突（しとつ）すると、鋸状になっている鎬（しのぎ）が鎧やチェーンメイル等の防具にひっかかって、そのまま抜けなくなってしまった事例が多く報告されたのだ。

その上、情勢によっては装備を放棄して撤退しなければならない事態も想定されている。一両数億円もする高価な兵器を、簡単にうち捨ててくるわけにはいかないので、廃棄しても惜しくない、廃棄予定あるいは既に廃棄済みであるが、手続きの遅れによって倉庫等に眠っていた装備をかき集めたのである。

六四式小銃を持つ者は二脚を立てて、照星（しょうせい）と照門（しょうもん）を引き起こす。配られた弾が常装薬なので、規整子は『小』にあわせた。

ある者は5・56㎜機関銃のミニミを構え、カチカチと金属製ベルトリンクで繋がれた弾帯を押し込んでいる。（六二式機関銃は、陸曹や幹部が血相を変えて「俺たちを殺すつもりかぁ」と反対したので、特地には持ち込まれていない。それほど故障が多く、言うことキカン銃と揶揄（やゆ）されていた銃なのだ）

高射特科のスカイシューターをはじめとする、35㎜二連装高射機関砲Ｌ90や、40㎜自走高射機関砲Ｍ42と言った新旧そして骨董品の対空火器が、上空から近付く怪鳥へと砲口を向けた。

次の照明弾が上げられ、闇夜が再び明るくなった。上空から降り注ぐ光が、夜空を背景にしていた敵を浮かび上がらせる。敵も、その足を速め、足音と言うよりは轟きに近くなっている。

小銃の切り替え軸（安全装置）を「ア」から「レ」へとまわす。

耳に付けたイヤホンから、指揮官の声が聞こえた。

「慌てるなよ、まだ撃つなぁ……」

慣れたわけではないが、これが初めてという訳でもない。自衛官達は近づいて来る敵を前にして息を呑みつつも、号令を待つことが出来た。

敵が、彼らの言葉で『アルヌス・ウルゥ』と呼んでいるこの丘に押し寄せて来るのは、これで三回目。そのうち二回は彼らの失敗だった。大敗北と言って良いはずだ。

この世界の標準的な武器である槍や弓そして剣、防具としての甲冑では、その戦術はどうしても隊伍を整えて全員で押し寄せるという方法となる。時折、火炎や爆発物を用いた攻撃（魔法かそれに類するものではないかと言われている）も行われているが、射程が短い上に数も圧倒的に少ないため、それほどの脅威にならない。そのために、どれほどの数を揃えようとも、現代の銃砲火器を装備した自衛隊の前では敵ではなかったのだ。

黒澤明監督の映画『影武者』で、武田騎馬隊が織田・徳川の鉄砲隊を前にたちまち壊滅するという場面が描かれていたが、それよりもさらに映画的に、人馬の屍が丘の麓を埋め尽くす結果となったのである。

だが、それでもなお彼らはこの丘を取り戻そうと攻撃を始める。

立ち読みサンプル
はここまで

自衛隊もこの地に居座って、アルヌスの丘を守ろうとする。

全てはここに『門』があるからだ。『門』こそが、異世界を繋ぐ出入り口であった。敵はこのアルヌスから銀座へとなだれ込んだのである。東京、そして銀座で起きたあの忌まわしい惨劇を防ぐためには、この『門』を確保し絶対に渡すことは許されない。

奪おうとする。そして守ろうとする。この二つの意志が衝突してついに三度目の攻防戦へと行き着いた。過去の二回の経験を学んだのか、今回は夜襲だった。月の出ていない夜間なら見通しも利かない。夜ならば油断も隙もあり得る……というのが、この世界の感覚だったのだろう。悪い考えとは言えない。が、しかし……次の照明弾があがると、コドゥ（連合）・リノ（諸王）・グワバン（国軍）将兵の姿が、はっきりと浮かび上がった。

「撃てぇ！」

東京そして日本は、二十四時間営業は当たり前の世界だ。昼だろうと夜だろうと区別無く、列（なら）べられた銃口は挨拶代わりとして砲火をもって彼らを出迎えたのである。